

# 聖書の学び／2006年

桑 栄 一

- 1月8日(主の公現) 今朝私たちが聞く旧約聖書のテキストは、「主の都、イスラエルの聖なる神のシオン」(イザ 60:14)の回復を告げるイザヤの預言の言葉であり、それがユダヤ人の王イエスの誕生によっていよいよ間近になったことを告げるために、今朝の福音書のテキストと組み合わせられているのです。主の公現の祭日を祝う教会は、その朗読によって“シオンを照らす光に向かい、…… 射出するその輝きに向かって歩む”(イザ 60:3)ようと招かれています。…… 実に私たちの救い主は、ユダヤ人の王としてお生まれになり、ユダヤ人の王として処刑された十字架と復活の主イエス・キリストであることを再確認して、皆で賛美を捧げましょう。
- 1月29日(年間第4主日) キリスト教を“イエスの教え”のことだと考えている人々は、聖書を通して使徒たちが現代の私たちに証言しているキリストの福音を、まだ理解していないと言わざるを得ません。田舎であるガリラヤ地方の教師たちとは違って、はるかにレベルの高い優秀な教師として、イエスは際だって立派な教えを会堂で語られたというだけの話であれば、それは使徒たちが“どんなことでもして”(1コリ 9:23)宣教した福音とはならなかったことでしょう。使徒たちが宣教した福音は、救済史の中の出来事(使 10:37)であって、“神が既に(旧約)聖書の中で預言者を通して約束されていた、御子イエスに関するもの”でありました(ロマ 1:2-3)。
- 2月12日(年間第6主日) どの教会でも通常“福音を分かち合う会”とか、教理や聖書を“学ぶ会”というものがあります。しかしその実体は、単なる素人の“感想を語り合う会”や“個人的意見や主張の会”でしかないことを、私たちは知っています。福音によって私たちが救われるために、御自分の方からわざわざ来てくださるイエスの宣教を、聖伝と聖書を通して聞いて信ずることから遠く離れていた20世紀の教会で、私たちは育った世代なのです。キリストは、私たち教会のただ中に、私たちすべての者の罪と反逆によって十字架につけられた方として、共にいてくださるということが、福音であり、力強く示される“イエスの御心”であることを、……
- 2月19日(年間第7主日) 医療や援助も、福祉やカウンセリングも、困難でしかも大切なことなのですが、しかしそれは“人の業”であって、必ずしも宗教に関係なくどこの国でも取り組まれている社会的課題です。しかし“罪の赦し”は、イエス・キリスト以外の誰も与えることの出来ないもの……、“癒やし”とか“温かさ”“自分へのご褒美”などと呼ばれるものとは似て非なる“神の業”であって、福音の中心的主題はこれなのです。“21世紀の教会よ、キリストの福音に立ち帰れ。そうすれば、再び迷い出ることはない”(エレ 4:1)と呼びかけておられる主の御声が聞こえて来るではありませんか。
- 3月5日(四旬節第1主日) しかし聖書が語っている“悔い改め”、特にイエスが語り、使徒たちが宣教した“悔い改め”はもっと特定のことに向けられていました。それは福音を信じるようになること、イエス・キリストの受肉と死と復活によって実現した神の国の福音を受け入れることであります。教会が使徒継承によって受け継いで来たものは、キリストの福音、罪の赦しの福音、神の国の福音でありますから、今朝私たちは改めて「悔い改めて福音を信じなさい」と呼びかけられているのです。
- 3月19日(四旬節第3主日) 聖書は難解な書物ではなくて、神の秘められた計画を使徒たちが告げ知らせた、普通の信徒のための書物です。使徒たちは“優れた(難解な)言葉や知恵を用いずに”(1コリ 2:1)、分かり易く語ったのであって、私たちが素直に、書かれてある通りに読むことが期待されているのです。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスは、神の右に座っていて、ミサで朗読される聖書

を通して今朝も私達に語りかけておられることを信じましょう。

- 4月2日(四旬節第5主日) キリストの救いは、信じる者を「死から救う」(v.7)救いです。“死”とは、神の怒りによって“滅ぼされる”(イザ6:5)ことであります。詩篇は“人を塵に返す”神の怒りを畏れることを教えました(詩90)。“死”は神による創造の祝福の対極にあって、いわば神から不要品として捨てられること、“罪が支払う報酬”(ロマ6:23)であります。使徒パウロは「死に定められたこの体から、だれが私を救ってくれるでしょうか」と述べた後に、直ちに続いて「私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と、キリストの救いを賛美しました(ロマ7:24-25)。
- 4月16日(復活の主日) 使徒たちの福音は、彼らが目撃した一連の出来事に対する彼ら自身の解釈ではなくて(ヨハ20:9)、復活の主から教えられたものであり、聖霊が彼らを福音の証人としました(使1:3,8,2:11)。ですから教会の宣教はこの使徒たちの宣教の継承ないし継続であって、彼らが「見て、信じた」ものから決して切り離すことは出来ません。このような使徒の証言を伝えるものとして、原始教会が福音書を生み出したことを、私たちは正しく理解しましょう。
- 5月7日(復活節第4主日) 社会の中で疎外され、抑圧され、差別され、搾取されている貧しい人々を助けることが至上命令となって、その後にいわば付録のように“イエスと神の愛の話”を美しく語ろうとして来た……、そんなキリスト教に、“人を神の子にしようと(エフェ1:5)、御自身を罪を償う供え物として献げられたキリスト(ヨハ4:10、ヘブ10:12,14)”の救いの重大性は、理解出来なかったという悲しくも確かな事実を、21世紀のキリスト者は認めることから再出発しなければなりません。教会が再びキリストの羊の群となるために。
- 5月21日(復活節第6主日) キリストの福音は、それが正しく宣教される時、人を悔い改めと信仰に導く神の力となります。なぜならそれは、キリストが「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ4:25)という知らせだからです。それに対して、私たちが過去に体験して来たキリスト教は、概して“キリストの愛にとどまる”ことではなくて、“キリストの愛を手本とする”という人間の道徳を教える“キリスト教的思想の宣伝”でありました。みんなが愛を実践して、みんなが小さなキリストになって……、という美しい目標が声高に語られることによって、イエスは救い主としてではなくて、偉大な愛の教師として人々に受け入れられて来たのです。
- 6月4日(聖霊降臨の主日) 聖書を読むことによって、読者が自分も使徒と同じになれると錯覚したり、自分も小さなキリストになれると勘違いすることがあって、そのような誤解が多くの人々を知らず知らずの中に“使徒たちの証言に耳を傾ける”ことから遠ざけて来ました。キリストもただの人、使徒たちもただの人間と考えることによって、自分も一人の人間として彼らと対等に論じ合えるという気持ちで、私達を思い上がりと傲慢に陥れたケースが多々あったのではないのでしょうか。……この使徒たちによるキリスト証言こそが、唯一の啓示の源泉であることを、第二バチカン公会議は「神の啓示に関する教義憲章」で宣言しました。聖霊は今日も使徒たちの証言と共に働いて、現代の私たちにキリストの福音を証ししてください。
- 6月25日(年間第12主日) “現代の善意と熱心”が作り出した“理想の世界像”を目指して進むことこそが、“キリストのために生きる”ことなのだという論理と、使徒たちが元来伝えたキリストの福音とは、明らかに別のものです。キリストは死んだ。キリストは過去の人物である。使徒たちも死んだ。使徒たちも過去の時代の人たちである。現代に生きる我々こそが、真にキリストの精神を現代に生かすキリスト者なのだという声が、保守的伝統的な教会を圧倒してしまったように見えます。しかし聖書の学びは、生きておられる天上のキリストに、今も使徒継承によって聖伝と聖書を通して語り続けている使徒たちの声に、耳を傾けることです。
- 7月23日(年間第16主日) 福音書は、これに耳を傾けるあらゆる時代の人々に、死人の中から復活して生きておられる主イエス御自身が、今も真の羊飼いと語りかけ、教えておられるのだということを想起

させてくれます。歴史の教会には使徒たちの後継者である司教たちがいることを、私たちは知っています。ところが、そこにはイエスの後継者はいません。なぜならイエスは復活して父なる神の右の座に着き、今も自ら牧者として教会に語りかけ、教えておられるからです。しかし、その教会の姿は「飼い主のいない羊のような有様」であることを、これまで多くのキリスト者は直視しようとしませんでした。20世紀カトリック教会の大神学者といわれる故カール・ラーナーは、多くの教導職による教会の現状についての認識を、“頑迷な保守主義と、口外されない密かな絶望との奇妙な混合”であると鋭く指摘しています。かつてモーセが主に訴えた「主の共同体を飼う者のいない羊の群れのようにしないでください」(民 27:17)という祈りは、今日決して不要になってはいないのです。

7月30日(年間第17主日) 奇跡は“驚き”であり“力ある業”ですが、イエス・キリストとその救いへの信仰なしには、ただの“不思議な業”でしかありません。聖体の秘跡は、信じる私たちには「永遠の命に至る食べ物」(ヨハ 6:27)であり、父なる神はこれにあずかる人を終わりの日に神の国に復活させてくださいます(ヨハ 6:54)。かつて飢饉の中にある預言者の仲間たちを養ったエリシャの奇跡の物語りは、やがて来られる救い主イエスを指し示す約束をその中に含んでいたと、初代教会は理解しました。奇跡をただの“不思議な業”としてではなく、イエス・キリストとその救いへの“しるし”として信じることの出来る人は、幸いです。

8月13日(年間第19主日) 外の世界に向かって反戦や平和を叫ぶ、しかも我が国からは戦争の抑止やテロ勢力排除のための派兵はしないと、まるで全く無責任な批評家のように振る舞って憚らないことが、キリスト教の現代に対する使命だと思っている人々が、聖書をその主張の理由付けに利用するのを見るのは実に悲しいことです。教会が、教会自身が、聖霊によって与えられた罪の赦しと神の国の約束に共に与っているという、信仰共同体としての一致を、再び取り戻さなければなりません。父・子・聖霊なる神に「做らう者となる」(エフェ 5:1)という課題は、共にミサをささげる私たち一人一人に今朝呼びかけられているのです。

8月27日(年間第21主日) 典礼憲章は、“典礼は、個人的行為ではなく、教会の祭儀である”と述べて、ミサの共同体性を明確にしました。この拝領前の信仰告白は、司祭の拝領と会衆の拝領が分離されないようにとの配慮によるとも説明されています(ユンクマン「ミサ」259ページ)。カトリック教会の典礼刷新は、奉献文こそがキリストの死と復活の記念であって、そこで教会の父なる神への奉献が行われることを明確にしようとしてしました(ミサ典礼書の総則 前文2、ユンクマン 前掲 231ページ以下)。このため、供えものの準備(同 49-53)をこれと区別して、会衆は奉納祈願から初めて起立すると定めています(同 20-21)。

9月3日(年間第22主日) カトリック教会の信者が、聖伝と聖書によってキリストの福音の“言い伝え(パラドシス)”を聞くことに、再び目覚めなければなりません。“カトリック教会の教えを守る”とは、それによって使徒たちが伝えた福音の“言い伝え(パラドシス)”を聞くためであると知りましょう。“カトリック教会の教え”は、決してキリストの福音に“何一つ加えることも、減らすこともしない”からです(神の啓示に関する教義憲章 10 参照)。聖伝を学ぶことはだれにでも許されていて、各種信条、ミサ典礼書や各種儀式書、それを解説する公文書類は、その気になればみな簡単に入手可能です。また翻訳聖書は、非常に優れた“新共同訳聖書”が刊行されていて、ラテン語やギリシア語を全く知らなくても、美しい日本語で読むことが出来ます。

9月10日(年間第23主日) 聖書で“貧しい人”とは、“神の助けなしには生きて行けない人”、“神のことはを待ち望む人”、つまり“心の貧しい人(マタ 5:3)”を指して用いられています。それは“敬虔な人”、“信仰に富んだ人”という意味であって、決して“自分たちは貧しい人の側に立っている”というジェスチャーのことではありません。私たちは皆、神のことはを、キリストの福音を必要としているのです。一人一人の信者が“自分で聞いて、信じる”(ヨハ 4:42 参照)ことが大切です。

10月15日(年間第28主日) 神のことは、すなわち福音は、私たちが例外なく終末の日に神の裁きの座の前

に立つことを明らかにしました(マタ 12:36、II コリ 5:10、I ペト 4:5 参照)。使徒信条はその第二項で、生き  
ている者と死んだ者を裁くために来られるイエス・キリスト(II テモ 4:1)を信じますと、宣言しています。し  
かしそれは、人が善い行いによって、この終末の日の裁きに耐え得る義人になれるということではありま  
せん。…… 実にキリストは十字架で、私たちが終末の日に受ける裁きに対して御自身を捧げてくださ  
いました。既に私たちからすべての呪いを取り除いてくださった裁き主が、天から来られる再臨の日を、教  
会は頭を上げて待ち望んでいるのです。(I コリ 16:22、フィリ 3:20、ヘブ 9:28、黙 22:20)

10月22日(年間第29主日) 「公に言い表している信仰」(ヘブ 4:14)とは、教会が使徒継承によって今日に至  
るまで受け継いで来たもののことです。“信仰”は決して、“主観的な”“個人的な”ものではなくて、“教  
会の信仰”(教会に平和を願う祈り)であって、それによって私たちは「大胆に恵みの座に近づく」(4:16)こ  
とができるのです。教会はこの使徒的信仰の伝承を、信条や各種儀式書によって、また聖書によって受け  
継いで来ましたので、現代のキリスト者はだれでも自由にこれを学ぶことができます。使徒たちは聖書の中  
で、信者が「憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために」(ヘブ 4:16)、“教  
会の信仰”を意欲的に学ぶことを期待しています(エフェ 1:17-18 参照)。各地の司教やそれぞれの小教  
区の司祭が、必ずしも理想的な有能さを備えていない時代や地方であっても、信者へのこの期待は変わ  
ることはないでしょう。

11月5日(年間第31主日) カトリック教会の熱心な信者の多くが、今も聖体拝領を個人的信心として大切に  
しているように見受けられます。しかし第二バチカン公会議は、ミサをはじめとする秘跡の共同体性を明  
確にしました(典礼憲章 11,14 参照)。交わりの儀において、主の共同体の交わりが目に見えるもの、人間  
的に体験出来るものになるという理解から、会衆は“奉納祈願からミサの終わりまでは立っている”と、  
ミサ典礼書の総則(21)は定めています(典礼の刷新／土屋吉正著 225 ページ 参照)。自分だけ拝領し  
たら、まだ会衆が拝領を続けているのに、(もう用事が終わったように)さっさと着席してしまうのは、あまり  
ふさわしいことではないのです。拝領の歌を、司祭の拝領が済んでからではなくて、司祭が秘跡を拝領す  
る間に始めるのも(総則 56 頁, 119)、同じ理由によることです。

11月26日(王であるキリスト) キリスト教の目的は地上に神の国を建設することであるという主張が、19世紀  
以来の教会の中で繰り返し形を変えて登場して来たことを、私たちは知っています。この類の考え方は、  
現代の我が国の多くのキリスト者の間にも漠然と存在しています。しかし使徒たちが伝えた福音によれば、  
それは天に属する国であって、地上の教会はその芽生えと開始であるとはいえ、その完成する終末の日  
の到来を渴望しているのです(教会憲章 6、ヘブ 13:14)。

12月3日(待降節第1主日) 初代教会が伝えた福音の終末的使信を、歴史の教会は一貫して今日に至るまで、  
典礼暦の最初の期節である待降節に聞いて来ました。…… 18世紀の啓蒙思想の登場以降、多くの世  
俗的教養人が、教会の受け継いで来た伝統的福音を真面目に信じなくなった中で、教会はその信条と典  
礼暦によって福音の終末的使信を守って来ました。

12月24日(待降節第4主日) キリストは、間もなく誕生する方としてマリアの胎内におられました。そのように、  
「二度目には、罪を負うためではなくて、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてく  
ださるのです」(ヘブ 9:28)。私たちキリスト者は、この「公に言い表した希望」(10:23)を、主の降誕直前の  
主日に再確認するようにと招かれています。

12月25日(主の降誕) 私たちは久しく教会が福音の使信を聞くことなく、それ故にまた私たちが互い  
に福音の使信を語ることもしなかったことを、重大な関心事とすべきです。クリスマスが、飼い葉桶のイエ  
スのメルヘンチックな“お祭り”であったことを、そしてこの祭りの始めから終わりまでイエスは乳飲み子  
のまま、復活して神の右の座に着いておられる現在のキリストについての福音の使信とは無縁であった  
ことを、現代のキリスト者は真剣に考えるべきなのです。